

平成八年七月六日(土)

第二三二回 史跡めぐり 資料

「黄金と侘び」秀吉「展」

越谷市郷土研究会

第二三二回 史跡めぐり ご案内

「黄金と佐び『秀吉』展」

とき 平成八年七月六日(土)

集合 越谷駅・改札前 午前八時五〇分

コース 越谷駅―営団地下鉄赤坂見附駅―

サントリー美術館

〈団体観賞後解散〉

○なら……(自由参加で)……

清水谷公園にて昼食

そのあと散策の候補地

◎桜田門・東京地裁周辺

◎豊川稲荷

◎ホテル・ニューオオタニ

まわるスカイラウンジでお茶

◎日枝神社

◎永田町周辺

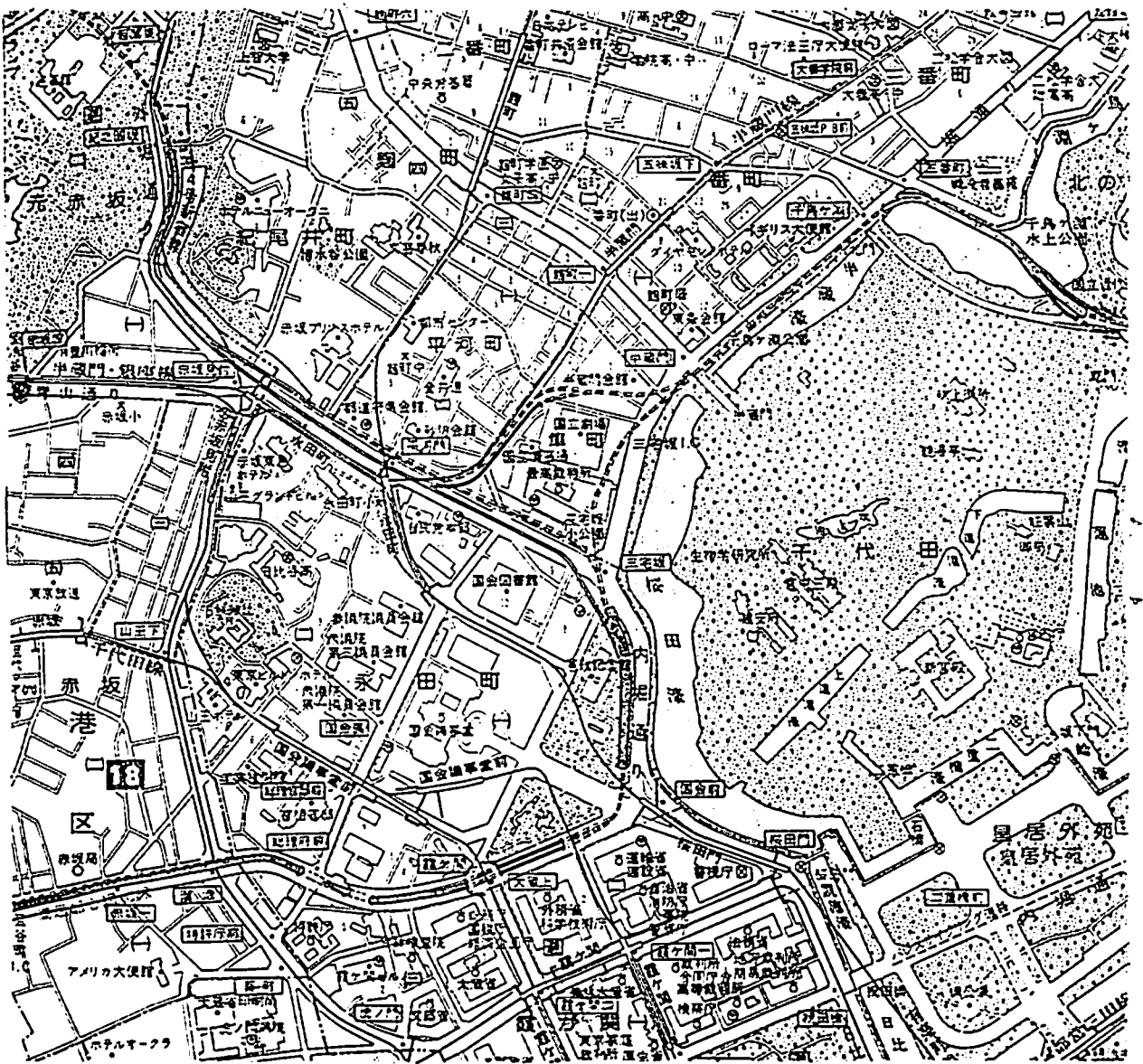
参加費 展覧会入場料 一、〇〇〇円

交通費 越谷―営団地下鉄赤坂見附

片道 五一〇円

(各自 ご購入ください)

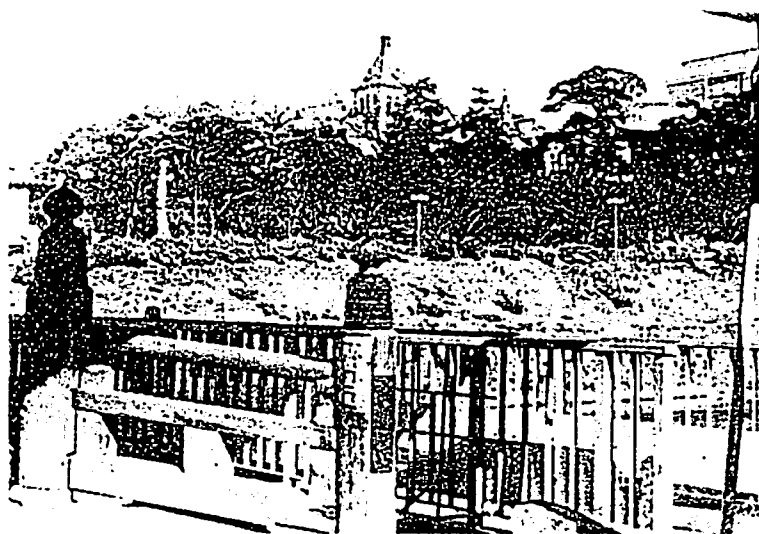
案内者 幹事・宮川 進



赤坂見附

▼千代田区紀尾井町・永田町二丁目・港区元赤坂一丁目・赤坂三丁目の接点
▼地下鉄赤坂見附駅下車

江戸時代麹町から赤坂への出口で、見張所がおかれていた赤坂見附は、また赤坂口・赤坂御門とよばれたところだ。この枅形はとくに秀技で北斗形の縄張りといわれ、一六三六（寛永一三）



坂離宮)にむかう途中、石川県士族島田一郎ら六名におそれ暗殺されたあたりである。公園内には、昭和四六年麹町通り道路工事のさい発掘した玉川上水の木管と巨大な石枅が展示されている。

赤坂見附にめんして外濠を弁慶堀とよび、弁慶橋がかけられている。大工弁慶小左衛門がつくった橋だとか、彼が東神田につくった橋を移建したとか、京都五条大橋に似ているから弁慶橋と名づけられたといわれ、ヒノキ造の勾欄と擬宝珠をつけた橋で

ある。港区元赤坂一丁目二のサントリー会館内にサントリー美術館、近くに豊川稲荷(曹洞宗妙厳寺)がある。

弁慶橋

の中央には八八(同二)年建立した重野安綱撰文の『贈右大臣大久保公哀悼碑』がある、七八(同二)年五月一

四日の朝、時の参議内務卿大久保利通が馬車で仮皇居(赤

年福岡藩主黒田忠之が構築したものだ。維新後撤去され、わずかに当時の石垣の一部が弁慶堀側に残っているにすぎない。近くの赤坂プリンスホテルの敷地に一六九四(元禄七)年建立の旧自証院(家光の側室)の霊屋(都有形、市ヶ谷より移建)がある。前項でふれた喰違見附跡から右にホテルニューオータニ(旧彦根井伊藩邸中屋敷、のち旧伏見宮邸)、左に上智大学敷地(旧徳川尾張藩邸中屋敷)裏手のあいだの坂道をくだって清水谷公園(旧徳川紀州藩邸中屋敷、のち旧北白川宮邸)を左にしなから赤坂見附跡につづく坂道を藩邸の頭文字をあわせて紀尾井坂(町名も)とよんでいるが、これは俗称だったようで、正しくは清水坂とよんだ。そこは古来清涼な清水が湧出した清水谷のあるところで一八九〇(明治二三)年公園に指定された。公園



元李王家東京邸

弁慶堀に沿って青山通りの坂道をのぼると、左側に赤坂門の石垣土手がわずかに残っており、赤坂見附跡の標識が立っている。『江戸絵図』によると、この坂道は50mほどの急な土手道で、両側の濠の水が赤坂門の枳形すずがたのすぐ下まで

入り込んでいる。土手道両側の濠の水位は違っていたと思われるが、この門は濠の水面から15mほど上にあった。1636（寛永13）年福岡藩主黒田忠之ただゆきが構築したもので、ここの枳形が特に秀技であったところから「北斗の縄張り（設計）」と称されていた。これは土手道と枳形を北斗七星のひしゃく形に見立てたのであろうか。

赤坂門跡から左折して諏訪坂すわをのぼると、左側に赤坂プリンスホテル（紀尾井町1）がある。江戸時代は紀州徳川家の中屋敷があった所で、明治以後は北白川宮邸となり、関東大震災後は元韓国国王の李王邸であった。ホテル別館は李王家の東京邸で、1930（昭和5）年に建てられた。さまざまな様式が混在する西洋館で、昭和初期の邸宅建築の貴重な遺構である。また、ホテルの庭には、1959（昭和34）年に移築した旧自証院靈屋じしよういんたいみく（都有形）があったが、ホテル改造工事で解体収納され、現在は見られない。自証院は將軍家光の側室お振おびの方で、尾張2代藩主光友に嫁した千代姫の生母である。1652（慶安5）年、千代姫が没した生母の菩提を祈り、一寺を起こして納めた御靈屋みたまがの小建築で、幕府御用大工甲良豊前守宗清の手になる。

枳形門すずがたかどは、枳形門は、鉄砲の使用を考慮に入れて、まもるにやすく、うってでるにも有利な構造になっている。まず、濠の外側から擬宝珠欄干造ぎぼしらんかんぞうの木橋をわたると、左右を石垣でかためた第一の門（高麗門）があり、これをはいると方形の空地で、その三方は石垣と鉄砲狭間てつぱうせま（銃眼）のある土塀をめぐらし、右側あるいは左側の一方は、いちだんと高い左右の石壁のうえに、土蔵造の渡櫓わたがしをわたした第二の門（渡櫓門）がある構造だ。江戸の三六見附みつひといわれた要所要所の城門は、みなこの形式の門だった。

一五三六—一八八三(天正五—慶長三十八)

安土桃山時代の武将。一五三七年(天正六)出生。もろ。豊田信秀に仕えた足軽木下弥右衛門を父として、尾張中村(同名)古屋中村区)に生まれた。はじめ木下泰吉郎を名乗る。

「天下統一まで」秀吉は遠江の松下之彌に仕えられた。織田信長の家臣となり、戦功と才覚によって頭角を現した。一五七三年(天正元)淺井氏の滅亡後に近江を与えられ、兵隊に居城して領域の支配を強めた。このころ京前守に任ぜられ羽衣姓を称し、幕行人としての地歩を固めた。七七年の、中国征伐には明智光秀とともに先鋒を務め、播磨三木城の別所理治を討ち、八一年には吉川經家が守備する因幡鳥取城を陥落させ、翌年中高松城を包圍し毛利氏との決戦を目前にしていた。このおりに信長諸將の謀に接し、直ちに毛利氏と講和を結んで兵をかせし、山崎の戦で明智光秀を敗つた。その直後に、高須金備で信長(信長の長男)の遺児三法師(秀信)を豊田家の跡目に加え、みずから後見人となった。この強引な措置に反対する宿老の柴田勝家と八三年近江坂本に戦い、越前北庄で滅ぼした。また織田信孝(信長の三男)を尾張内海に自殺させ、三河播磨を握った。同年かつての石山本願寺跡に、大坂城を築き、畿内先進地帯を権力的に掌握し、全国制覇に乗り出した。翌年織田信雄(信長の次男)、徳川家康の連合軍と小牧・長久手に戦い、外交的手段で家康を臣従させた。八五年関白に任官し、古代的な權威をかりて身分制社会の頂点に立ち、翌年太政大臣となり尊臣性を受けた。みずから京都に造営した聚楽第に八八年後陽成天皇を迎えるなど朝廷に接近し、延暦寺や春日社の復興に力をかけて仏法の庇護者を自任する態度をとった。他方、和子の根系・根親一帯を鎮圧し僧侶の武器を没収し、公家・寺社の社領を改めて所領の確立を行った。四國の具宗我部氏を降したのち、一五八七年九州の島津氏を平定、新たな固分を行った。九〇年小田原の後北条氏を滅亡させ、さらに奥羽の諸大名も服属させ、ここに全国統一を達成した。

「統一権力としての性格」秀吉の全国統一は武力による征服であることはもちろんだが、檢官による停戦命令など天皇の權威を十分に利用する点に特徴がみられる。また主要都市や鉾山を直轄下に置き貨幣を鋳造し、諸國の座や関を管理するなど商工業の把握に努めた。方

「統一権力としての性格」秀吉の全国統一は武力による征服であることはもちろんだが、檢官による停戦命令など天皇の權威を十分に利用する点に特徴がみられる。また主要都市や鉾山を直轄下に置き貨幣を鋳造し、諸國の座や関を管理するなど商工業の把握に努めた。方、寺大仏殿の造営のため職人を動員し、百姓から武器を取りあげる。刀狩令の口実とするなど、新たな身分編成に努めている。九州征伐の直後にキリシタン宣教師の追放を指令し(伴天連追放令)、布教の手段となっていた南蛮貿易を自己の統制下に置き、武器など先進技術や生糸輸入の独占を図った。山崎の戦の直後から始まった、太閤検地は、征服地を拡大するにつれて全国に及び、石高制に基づいた年貢収取体制の確立により、兵農分離を促進させた。一五九一年(天正十九)の身分統制令によって武家層が公人かかってに百姓・町人に異なることは禁止され、身分の固定化をもたらした。「豊年の秀吉」検地の年と鉄砲隊の威力によって進められてきた秀吉の全国支配は、天下統一によって新たに獲得すべき領地がなくなり、家臣へ恩賞として与えることが不可能となった。一五九二年(文祿元)かねてから報償を求めていた明國を討つため朝鮮出兵(文祿・慶長の役)を令し、全国の大名を肥前名護屋に集結させた。すでに関白は甥の秀次に譲り、みずからは、太閤として外征に専念し朝鮮へも渡るつもりでいた。緒戦の勝利に氣をよこした秀吉は、後陽成天皇を北京に移し、その関白に秀次をつけ、日本の帝位は若宮(皇子良仁親王)か八条(宮)皇弟(首)親王に継がせ、その関白には羽衣秀保(宇喜多秀家)をあてるといった、日本・中国・朝鮮にまたがる三國圖割計画を显示した。これは大局的判断を欠いた空想にすぎないものであるが、秀吉の描いた構想を如実に物語るっており、やがてインドまでを含めたものに発展していく。しかしこの計画は朝鮮民衆の義兵組織によって碎かれ、明の援軍の到着によって補給路が断たれた。明との和議交渉に際し、秀吉は朝鮮の南半分を割譲や勘合貿易復活、明の皇女を天皇の后とすることなどを要求した。この交

渉は決裂し、九七年(慶長二)再び朝鮮へ兵を送った。この間、秀吉に皇子秀頼が誕生したことなどから秀次との關係が不和となり、一五九五年秀次は高野山で切腹させられた。戦局の停滞化にともない大名間の対立は深刻化し、農民は兵糧米調達のため過重な負担を強いられるなど、国内は重苦しい雰囲気包まれた。九八年はなやかな醍醐の花見が催されたが、秀吉は心身の衰えが激しくなり、八月に幼少の秀頼の前途を案じながら、五大老・五奉行に遺言を致して世を去った。「太閤伝説の成立」秀吉の出生は謎に包まれており、自

己直臣的要素と重なって史実を無視した物語が作られた。すなわち、秀吉の母(大政所、天璋院)は秋中納言という貴族の娘で、尾張に配流されていたが、許されて上洛して官中に仕え、再び尾張に帰ってすぐに秀吉を生んだと、天皇の寵愛であることを暗示するものである。これは大村由己の「関白任官記」にも記されひろく流布した。同じような趣旨は外交文書にも盛って、一五九〇年(天正十八)の朝鮮、九三年(文祿二)高山(台湾)へ送った国書では、自分が生まれるとき母は太陽が懐中に入る夢を見、その夜は日光が室中に輝いたと述べている。自己を神格化した天皇との關係を強調するまじった虚妄の物語が作られることは、一面では豊臣政権の性格を暗示するものと言えよう。

秀吉の出自が無名の名主百姓性層であることは、専制権力者という面を見失わせ、江戸時代においても庶民の間に「豊太閤出世物語」として養育的な共感を抱かせるものとなったが、明治以後はそれが増幅して作り変えられ、英雄崇拜の觀念と結びついていった。とくに第二次大戦前では「大東亜共栄圏の先駆者」として賞賛するような風潮もあったことを考える必要がある。

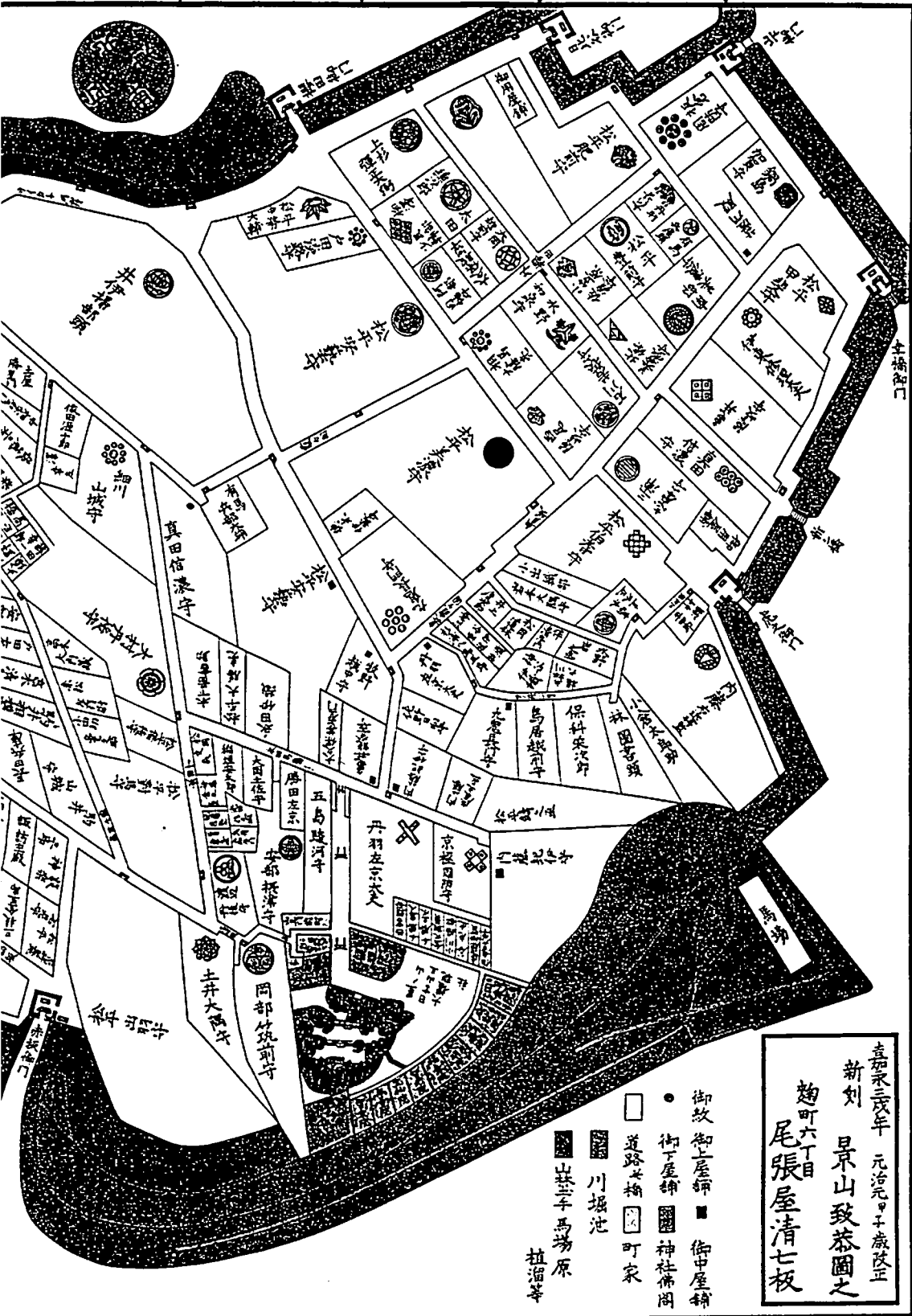
秀吉



豊臣

印

④ 麴町永田町外桜田絵圖（一八六四年）

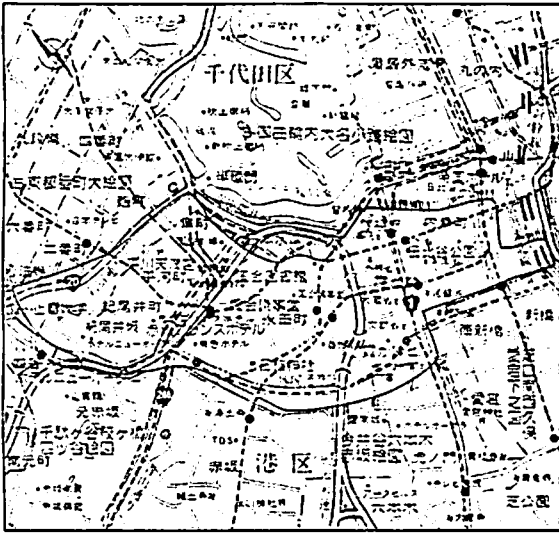


嘉永六年 元治元年子歲改正
 新刻 景山致恭圖之
 麴町六丁目
 尾張屋清七板

- 御紋御上屋鋪 ■ 御中屋鋪
- 御下屋鋪
- 神社佛閣
- 道路
- △ 川堀池
- 山
- 草場

(原本492mm X 536mm)

範囲図



④ 麴町永田町外桜田絵図(一八六四年)

解説

本図は、六版中五版目の図で、初版は嘉永三年(1850)。二版は安政二年(1855)。三版は万延元年(1860)。四版は文久三年(1863)。最終版は明治二年(1869)。

取図範囲は、道政増上、男子の本懐と目される永田町を中心とし、桜田番事と目される警現庁を始めとする寛ヶ築百行街、甲州街道の出発点・半蔵門より麴町は四谷御門、山王塚、瀧池までの地域。

本図のポイントは、なんと目つても版元尾張屋の所在が馴染まれていること。前述の如く切絵図の情報は大名・武家屋敷、神社仏閣の所在を示すもので、それ以外の情報記載はタブーであつたにもかかわらず、自家宣伝は獨立派。麴町六丁目・大横町のところに「切ズ板元金!」とあるのがそれ。現在の三菱銀行麴町支店が建っているところ。初版には載っていない。

平河町の平川天神は、慶長年間に関戸城内平河御門外より移転して来た古い社で、現在でもビルの影に小さくなって鎮座ましている。

瀧池の上に社屋な社殿を存する日吉山王大明神は現在の日枝神社で、恐れ多くも將軍家の産工神。この社、明暦の大火(1657)以前は、反対側の横白虎の上、掃帚明石瀧(兵庫)十萬石格・松平兵部大將上屋敷(現・国立劇場)のところに鎮座していた。俗称「山王さま」と目し、この氏は、神田明神の氏子と闘を争うチャキチャキの江戸ツツと目することになる。神のお定走りはお環さん。この裏手に真前のエリート出世コース進学坂、一中、一高、東大の第一御門、府立一中(日比谷高校)が泉塚和田番五萬三千石・岡田兵衛守上屋敷の跡に建てられた。

- ※田舎集事堂……安五広島瀧(広島)四十二萬六千石・松平(武野)安五守中屋敷跡。(五-一)
- ※田舎廻り……豊後宇土瀧(熊本)三萬石・紀川山城守上屋敷、肥前大村瀧(長崎)二萬七千九百七拾石・大村丹後守上屋敷跡。(四-二)
- ※警現庁……豊後杵築瀧(大分)三萬二千石・松平中務大將上屋敷跡。(五-3)
- ※日比谷公舎……長門萩瀧(山口)三十六萬九千石・松平(毛利)大將大夫上屋敷、肥前佐賀瀧(佐賀)三十五萬七千石・松平(鍋島)肥前守上屋敷、国用屋敷跡。(六-1)
- ※帝國ホテル……奥中山瀧(岡山)五萬石・板倉周防守瀧。(七-1)
- ※赤坂プリンスホテル……紀伊和歌山瀧(和歌山)五十五萬五千石・紀伊中將中屋敷跡。(参-4)
- ※ホテル・ニューオータニ……近江彦根瀧(滋賀)三十五萬石・井伊掃部頭中屋敷跡。(参-7)
- ※上智大学……尾張名古屋瀧(愛知)六十一萬九千五百石・尾張中納言中屋敷跡。(五-5)
- ※森が突ビル……日向延岡瀧(宮崎)七萬石・内膳右近將監上屋敷跡。(七-3)
- ※日本水産ビル……近江彦根瀧(滋賀)三十五萬石・井伊掃部頭上屋敷跡。旧陸軍参謀本部跡。(四-3)



